
常闇の魔女

空色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

常闇の魔女

【Nコード】

N1257BA

【作者名】

空色

【あらすじ】

『今思い返すならば　もう、あの時すでに、自分は囚われていたのだ。』

その身に、金色を頂く王と黒を宿す女。

彼らの出会いから始まる、永きに渡る物語。

短編「ある始まりの物語」を連載としました。マイページ更新となりますが、よろしくお願ひします。

その日、彼女が王都に出かけたのは本当に偶然のことだった。普段、奥深い森に住む彼女は、もっぱら趣味である薬作りに精魂を費やしていた。

薬を作るのは楽しいし、なにより森にはたくさんの薬草が生えていたので原料には困らない。

実り豊かな森であったので、家の前のささやかな畑と森からの恵みで暮らしは十分潤っていた。

時折、作成した薬を売り現金を得て、休暇と称する買い物を楽しむ。そんな慎ましい日々を、彼女は何よりも愛していた。

底冷えするような寒さが和らぎ、日差しに暖かさが混じるようになっていたある日の早朝。

いつも通り森の中を散策していた彼女は、この季節にしては珍しい薬草が生えているのを見つけ、喜び勇んで薬の作成に取り掛かった。件の薬草は鎮痛効果が高く、そのまま噛んでも、乾燥させて粉にしても使える優秀な素材だった。

鎮痛・消炎作用に優れた軟膏を作り終え、満足げな息を吐いた彼女は、ふとあることを思い出した。

日ごろ懇意にしている薬屋が、そういえばこの類の薬を欲しがっていたのだ。

彼の店はそれなりに繁盛し、昨今、小さいながら王都に店を構えるに至ったと連絡をもらっていた。
ならば、祝いのついでに少し商売でもしてこようかと思ひ立ち、作成したばかりの薬のほかに、いくつか作り溜めておいたものを手に家を出た。

久しぶりに訪れた王都は、相も変わらず華やかで活気に満ちていた。王城へと続くメイン通りはたくさんの人と出店で溢れ、あちこちから客引きの声が威勢よく響いている。

気まぐれに店を冷やかしながら、帰りに新鮮な果物でも買って帰ろうかと考えていたとき、彼女は視線の先に人だかりを見つけた。その人垣はどうやら、城の門前に集まっているようだった。ちよつとした野次馬根性で人垣に近づき、たくさんの頭越しに首を伸ばしてみると、どうやら門前の立派なたて看板が人だかりの原因であるらしかった。

あまりにも遠く、残念ながら看板の内容を読むことができなかった彼女は、目の前に立つ恰幅の良い女性に何事が起きたのかを尋ねた。

「すごい人だかりですけど、城で何かあったんでしょうか？」

「ああ、どうやら短期求人のようにだよ。急に人手が必要になって、

下働きを求めてるって話さ。」

「へえ、それは珍しい。」

普通、城での求人をおののような形で募集することは滅多にない。

いくら下働きといえど、出自のしつかりとした人間を、城内の紹介で雇い入れる程度だ。

「なんでも、今年は春の花祭りとお園祭を合同でやるらしくってね。

その準備に人手が割かれるから、城でも働き手が足りないんだらう

ね。」

「なるほど、じゃあ、今年の祭りはいつそう華やかになりそうです

ね。」

花祭りとは春の訪れを祝う祭りであり、お園祭は野菜や果物の豊作を願う祭りである。

メイン通りを軍の歩兵隊や騎馬隊が練り歩き、各所で踊り子が華やかな舞を披露し、道行く人があちらこちらで色とりどりの花弁をまく。

王城の門が開放され、美酒が振舞われたあと、午後一番の鐘が鳴ると同時に王を始めとする王族が都を一望するバルコニーに顔を見せる。

国の頂に立つ貴人を垣間見るといふ至上の幸福に人々は酔いしれ、また、同時に今年一年の豊穰を願うのだ。

王都の民だけでなく、他の町や村、ひいては他国の観光客で街は溢れかえるのだらう。

とても華やぐ情景ではあるのだが、あまり人ごみの得意でない彼女

は、その光景を想像し僅かに苦笑した。
物思いに耽っていた彼女は、急にその手を引かれ、思わずたたらを踏んだ。

顔を上げると、城門が開かれ兵士の号令に従って人々が城内へと歩き始めていたところだった。

「なにポーっとしてるんだい、乗り遅れちまうよ。ほら、おいでな。」

「え、あの・・・、ちよつと・・・!」

自分はけして求人に応じた訳ではなく、ただの野次馬であったのだが、それを伝える間もなく人波にもまれる。

あれよあれよという間に簡単な面接をされ、ようやくその旨を伝えられた時には、洗濯場の下女となることが決まってしまうていた。

「なんだい、あたしはてつきり出稼ぎに来てるとばかり思っちゃまって。悪いことをしたねえ。」

「あ、いえ。良いんです。早いうちに言わなかった私も悪いんですし。」

「まあ、御園祭が終わる数ヶ月の話さ。城で働いたつても、地元に戻れば箔がつくさね。」

「ええ、まあ、・・・そうですね。」

地元に戻っても、周りにいるのは野生動物のみであるが、彼女は曖昧な笑みを浮かべる。

兵士達の食堂に勤めることになった女性と別れ、洗濯場に案内され

る女達の最後尾を歩きながら、彼女は小さくため息をついた。知己の祝いとささやかな商売をするはずが、とんだ事になってしまった。

まあ、決まってしまったものは仕方がないし、今更辞めると言出し辛いのも事実である。

数ヶ月をこの王城で勤めたら、暫らく王都にくるのは控えようと決心し、彼女は歩みを進めた。

臨時雇用者達に、始めに指導されたのは城内での作法や注意事項であつた。

王城は主に4つの区域に分かれており、城門に近い南側は外から運ばれてきた荷の上げ下ろし等、身分の低いものが働いていることが多い。

東側は後宮、西側は成人した王族の生活の場であり、一番奥に位置する北側がこの国を動かす中枢となっている。

そのように城内は明確に区分けされており、それぞれの区域前には立派な門と、兵士の守りがつき簡単に行き来はできないような仕組みとなっていた。

よって、基本的に下働きである自分達が、高貴な身分の方々に会うことは滅多にないが、皆無と言つわけではない。

城では身につけるものの色で位や担当地区を識別しているらしく、

騎士であれば鎧、魔法士であればローブ、官吏であれば衣のそれぞれ一部分の色が異なってくるのだそうだ。

女官は襟元や袖の刺繍や色で分けられており、南地区の下女である自分達は、灰色が多く使用された服であり、襟や袖は無地となる。また、高位の官吏や女官に遭遇したときは頭を下げ、過ぎ去るまで決してあげてはならないこと等を簡単に説明された。

その後、洗濯する際に気をつけること、例えば布の質、色ごとに分別し洗うことや、洗濯に出された部署ごとに洗い物をする事。

日干しをして良い布や、日陰干しをしないと傷んでしまう物など、細かに注意を受けた。

とはいえ、臨時雇用の身の上で、さらには年若い娘に分類される彼女は、もっぱら洗濯物の運搬を任されるようだった。

あらかた説明が終わる頃には、夕餉の時刻が迫っており、一同は下人用の食堂へ移動した。

それなりの広さを持つ食堂では、数百人の下人が夕餉をかき込んでいた。

配膳を待つ列の最後尾に並び、盆を手にして並ぶ。

雑穀の混じった少し硬めのパンに、クルトと根菜のサラダ、鶏肉の燻製が2切れ、スープが本日の夕食だった。

木で作られた長い机の端に腰掛け、彼女は汁物を啜った。

具は少量の青菜と豆のみではあったが、それなりに出汁がきいているようで、冷えた体には嬉しい暖かさだ。

小さく口元を綻ばせていると、隣に数人の少女達が集まって腰を下ろした。

どうやら、同じ村から出稼ぎにきているらしく、自分達が配属された部署について気安い様子で話をしていた。

見知った者もいない彼女は、少女達の話の聞くともなしに聞きながら燻製を口に運ぶ。

やや燻しすぎの気もするが、臭みがなく、その点では彼女の好みであった。

「そういえば、あたし、遠くからだけど、とても格好良い兵隊さんを見たのわ!」

「やだ、羨ましい。いーな、あたしも兵隊さんの部屋掃除になれば良かったのに。」

「あたしだって、すっごく遠くからだけど、後宮のお姫様を見たんだから!とても綺麗な赤毛だったわ。」

「じゃあ、魔力持ちの姫様だったのね。赤髪ってどんなものなのかしら、一度近くで見てみたいなあ。」

「それを言ったら、やっぱり金の髪じゃない?日の光を受けると、きらきら輝くって話よ。」

「きつと、あたし達みたいなの下賤なものが見たら目が瞑れちゃうわ!でも、一度でいいからやっぱり見てみたいね。」

おしゃべりに花を咲かせる少女達に、彼女は思わず笑みを浮かべる。そんな彼女達は全員、黒髪、黒目という色合いだ。

というか、自分を含めこの食堂に集まる下人たちは殆どが同じく黒の髪と瞳を持っている。

逆に魔力を持つ者は、髪や瞳に色を持って産まれてくる。

火の属性であれば赤、水の属性であれば青というように、色合いは様々だ。

その中で、もっとも最高峰に位置する色が黄金色であり、それを有するのは少数の王族のみであった。

金は全ての属性を持つ、精霊に愛された色である。

現在、至上の色を身に纏うのは、現国王陛下とその第一王子のみであり、庶民がその高貴な色を目にすることは殆どない。

だからこそ、年に数回王族がバルコニーで一同に会する姿は格別である、とは知己の薬屋の談だ。

（まあ、私には縁のない話だけれど。）

最後の燻製を口に放り込み、彼女はそっと席を立った。

本来なら、自分はあるの穏やかな森の奥から出てくるはずのない者だったのだ。

それが何のいたずらか、就職先を求めていると勘違いされ、今に至っているだけ。

数ヶ月のお勤めがすめば、もとの静かな暮らしに戻ることができ。城で過ごすであろう日々が、どうか平穏であるようにと、彼女はそればかりを祈るのだった。

彼女が臨時の働き手として城に就職してから、何事もなく幾日かの時が流れた。

洗濯場の仕事にも慣れ、同室の仕事仲間ともそれなりに打ち解けていた。

「じゃあ、今日はこっちの籠をもって行こうかな。」

「なら、私はこちらを担当しますね。」

「あ、これ兵舎に持ってくやつじゃない！今日はあたしが当たりね。」

南門近くの中庭で日干しをしていた洗濯物を取り込み、植物の蔓で編まれた籠に放り込む。

あとは取り込んだ衣類を担当場所に届け、代わりに汚れ物を洗濯場に運んで、自分達の仕事は終わりだ。

届けられた衣類を仕分けし畳んだり、汚れた衣類を熱湯につける作業はまた別の人間の分担になる。

昼餉の約束をした後、両手でなんとか抱えることのできる籠を持ち

上げ、中庭からそれぞれ担当する棟に向かって歩きだした。

彼女が本日担当しているのは、南の地区の東門近くにある後宮女官の詰め所である。

とはいっても、部屋付きではない下級の女官達であるので、何人も
の女官が共同で寝起きをしているような場所だ。

この時間は後宮の掃除や、昼餉の準備に忙しく立ち回っているらしく、もぬけの殻であるのが常だった。

段々と暖かさを増してくる日の光に、彼女はそつと目を細める。

今頃、自宅付近では春を告げる草が芽吹き、様々な種類の薬草が顔をのぞかせているだろう。

ささやかな畑は手入れをする者がいないため、残念なことになってしまっているかもしれないが、仕方のないことである。

王都を離れるときは、夏野菜の苗と、都でしか手に入らない珍しい薬草の種でも買って帰ろう。

それらを畑に植える楽しみを思うと、自然と彼女の口元に笑みが広がった。

取り留めなく考え事をしていたせいか、彼女が東側の喧騒に気付いたのは東門まであと少しという距離になってからだった。

後宮特有の空気というか、どんなに忙しい時間帯であっても、東側は楚々とした雰囲気であることが多かったのだが、今日はどこことなく緊張を孕んでいる様だった。

遠くの方から、誰かを呼び、探し回るような音が漏れ聞こえてきた。南の人間である自分が巻き込まれることはないだろうが、面倒事には近づかないのが一番である。

さっさと仕事を終えて退散しようと、止めていた歩みを再開した彼女は、微かな嗚咽を聞いた気がした。

耳を澄ますと、それはどうやら頭上から聞こえてくるらしく、そつと上を仰ぎ見る。

何だかとても嫌な予感がしなくてもないが、もし彼女の予感が当たっているなら放っておく事もできないだろう。

深いため息をつき、洗濯籠を木の根元に置いて、彼女はその幹に両手を伸ばした。

樹の中ごろにある太くしつかりとした枝に手を伸ばし、両腕の力で体を持ち上げた先、彼女の目に飛び込んできたのは眩いばかりの黄金だった。

日の光を受け、風が通り過ぎる度にキラキラと反射するその色に、彼女は思わず天を仰いだ。

今世に、この色を宿すのは二人しかない。

一人はこの国の頂点に座す王であり、残る人物はただ一人。

間違いであつて欲しいと願いながら、殆ど確信を持って彼女は己のひざに顔を埋めた子供に囁く。

「もしや・・・王子殿下でございますか？」

びくりと肩を震わせ、彼は勢いよく顔を上げる。

その拍子に、新緑を思わせる翠の瞳からぼろりと涙が零れ落ちた。

表情を変えずに、彼女は内心で果てしなく深いため息をついた。

今現在、後宮の人々が血相を変えて探し回り、名を呼ばわっていた人物が頭に浮かんだ。

樹上で一人嗚咽を漏らしていた彼こそが、フェヴィリウスの第一王子、ラズフィス・ユディア・フェヴィリウスその人であった。

こぼれんばかりに瞳を見開いた後、第一王子はおもむろに服の袖で目元を擦り始めた。

彼女は慌てて懐を探り、持っていたハンカチを差し出す。

赤くなつてはいけないと思つたのだが、よくよく考えれば庶民の持ち物である布より、王族の衣服の方が余程柔らかな物を使用しているはずだ。

まあ、その豪華な生地を汚さないためと考えれば、いくらか理に適うはずだ。

「殿下、よろしければこちらをお使ください。」

彼は揺れる瞳でじつとこちらを見つめた後、彼女からハンカチを受け取り顔に押し付けた。

漏れる嗚咽を飲み込みながら、どうにか感情を抑えようと必死に抗っているようだった。

小さく震える肩を見下ろしながら、彼女はじつと彼の激情が治まるのを待った。

御年、7歳になるはずの彼の王子殿下は、ちゃんと食事を摂っているのかと心配になるくらいには線の細い少年だった。

鼻筋がすつきりとしていて、整った顔立ちの少年は、見ようによっ

ては女の子にさえ見えそうだ。

彼が落ち着くのを待ちながら、彼女はその後にごうするべきかと頭を悩ませる。

なぜ王子殿下が泣いているのか、どうやって東側を抜け出してきたのか、そもそも子供が抜け出せてしまふ後宮の警備はどうなっているのかなど疑問は尽きない。

しかし、正直に言ってもらもろの疑問はひとまずどうでも良い。

彼女にとって目下の悩みは、王子殿下をどうやって穩便に後宮へ届けるかということである。

一番良いのは、来た道を殿下自らお帰りいただくことだが、この泣きぶりを見るとしばらくは無理かもしれない。

王族をこのまま放置しておくわけにもいかず、彼女は己の昼餉を諦め、約束を反故にすることを心の中で同僚達に謝った。

嗚咽と共に僅かに揺れる頭を見るともなしに見ていたが、一つ下の枝に足を置き彼に背を向けて王都を見下ろした。

そういえば王族をこんな間近で、しかも泣いている姿を直視するのは不敬にあたる可能性もある。

こんなことで縛り首はご遠慮願いたいので、できることなら王都永久追放とかにしてくれないだろうか。

遠い目でそんなことを考えていた彼女の耳は、背後から届く小さく擦れた声を拾い上げた。

不敬罪の文字が頭の中をちらついていたが、泣いている子供を放っておくのは気が引ける。

彼女はほんの少し項垂れてから、気を取り直して彼に向き直り声をかけた。

「殿下、いかがなさいましたか？」

「・・・なぜ・・・お前は・・・泣くなと言わぬのだ。」

消え入りそうな声で呟かれた言葉に、彼女は暫し沈黙した。

なぜと問われても返す答えが無かったというのもあるが、彼の言葉に僅かに衝撃を受けていたのだ。

彼女の知り合いに、今年の夏に9歳になる息子がいる。

彼はよく遊び、よく笑うが、逆に気に入らないことがあると、癪癪を起こしてはよく泣いた。

そもそも、子供とは感情の起伏が激しく、よく泣くものである。

そう、それが普通の子供であるならば、だ。

「皆、王の子であるならば感情的になつてはならぬと言う。それに、余は王子だ。妹達のように泣くのは恥ずかしいことなのだろう。」

己の膝を抱き、身を守るように小さくなっている子供。

大声を上げて泣くことすらできず、こんな風に隠れて感情を吐き出すことしかできない。

そんな姿に、こみ上げてきた気持ちは何であったのだろうか。

それは単なる同情であったのかもしれないし、あるいは彼にかつての自分を重ねたのかもしれない。

つらい、こわい、くるしい、本当は大声で叫びながら泣きたかった。でも、助けを求める権利は、自分にはなかったから。

必死で押し殺して、いつしか諦めることを知った。

あんな風に血を吐くような苦しみを、目の前の幼い存在に背負って欲しくなかった。

たとえそれが、王の子であろうとも。

だから、思わず声をかけた。

平穩を望むのならば、けして関わってはならないと理解しながら。

「下賤の身である私に、王族方のお心は分かりかねますが、男であるから泣いてはならぬと言つことはないかと存じます。」

かつての記憶に顔を強張らせていた自覚があるため、できうる限りの気力でもって彼女は笑みをつくる。

表情が引き攣つてはいないかと危惧したが、見開かれた新緑に映る自分は存外穏やかな顔をしていた。

その事実にも力を得て、彼女は幼い王族に向き直った。

「少なくとも、私の知人には成人した男でありながらよく泣く者がおりますが、恥ずかしい奴と思つたことはございません。」

彼は大泣きした後、実にすつきりとしていましたし、その時どうすれば良かったか、次に何をすれば良いのかを考えられる者でしたから。」

もう会わなくなつて久しい彼の人を思い出す。

彼は優に2メートルを超すのではないかと思えるほどの大男でありながら、とても感情豊かな男であった。

悲しいことがあれば人目もはばからず泣き、感動しては泣き、悔しさに耐え切れず涙を流し、他人に感情移入しては声を上げて泣いた。だが次の日にはからりと笑い、前を向いて歩いていけるだけの強さを持っていた。

夏風のように爽やかで、当時鬱々としていた自分にとっては、実に眩しい男だった。

「私は泣くことが悪いこととは思いません。泣いた後、良く考え、確実に歩んでいけるのならそれもまた、一つの成長であると考えるからです。」

「・・・余はその者のようになれるだろうか。」

「殿下ご自身が願い、努力されるのであれば。」

果たして自分がそうあれたかと問われれば、首を傾げざるを得ない。それでも、この太陽の光を宿す少年が、どうか暗闇に飲み込まれることがないように。

ただ、願う。

第一王子は膝の上で握り締めていた両手を解き、俯いてしばらく動かなかった。

小さく鼻を噉り、次に顔を上げた。

少し赤くなっただけのもの、その目に涙は見当たらなかった。そのことに何故だかほっとして、彼女は自然と己の唇が弧を描くのを感じた。

「さあ、そろそろ東へお戻りください。きっと、皆が御身を案じて

おります。」

彼女は降りやすいようにと、足場に使っていた枝を移動し王子殿下を促す。

一つ頷くと、彼はそれほど危なげなく幹を利用して降りてくる。

それを確認してから、彼女は枝を伝って先に降りて大樹を見上げた。

何かあればすぐに対処できるようにと見守っていたが、程なくして王子殿下は慎重に地に足をつける。

衣服についた木屑を払った王子は、はにかんだ様な笑みを浮かべた。思わず微笑み返しそうになった彼女は、雇用の折に説明された作法を思い出し慌てて平伏する。

今更のことであるが、それに加えて王族を見下ろしたとあっては、無礼にもほどがあるだろう。

「なぜそのようなことをする。顔を上げよ。」

「恐れ多つございます。」

頭を上げない彼女に、王子殿下は不満げな雰囲気をかもし出しているようだった。

暫しの沈黙の後、彼は小さくため息をつく。

「ならば、名を。お前の名を教えてくれ。それくらいなら良いだろう。」

「・・・ユーリ、と申します。」

「ユーリか、良い名だな。」

彼女は、幾分か和らいだ王子の声色に心の中で安堵する。気づかれないようにそっと視線を上げた彼女は、その光景に息を呑んだ。

精霊の寵愛を受ける、黄金を頂く者は光そのものである、とは誰が言った言葉であつたらうか。

今ならば、心の底から同意することができるだろう。

彼の顔に浮かぶのは、満面の笑みであつた。

まるで、とても良いモノをもらったとでもいうように、頬を紅潮させている。

太陽の光を受け、彼は眩いばかりに輝いていた。

それが、後に28代フェヴィリウスの国王となる、ラズフィスと彼女の出会いであつた。

ユーリ達は午前中の仕事を終わらせ、人でごった返す食堂に立ち寄った。

ちよつど昼の混雑時に当たってしまったようで、たくさんあるはずの席は殆ど埋まってしまっている。

全員が集まって食べるのは無理そうだと判断し、それぞれ空いている席を探しに散らばった。

精一杯背伸びをして、食堂の奥まで見渡してみたものの、あいにく座れそうな場所は見当たらない。

仕方がないため息をつき、ユーリは厨房の入り口に近づいて声を上げる。

「すみません、外で食べるので食材を分けてもらえますか？」

「あいよ、ちよつとまってな。」

厨房の料理人に、パンと葉物野菜、ベーコンの切れ端を分けてもらう。

皮の水筒にミルクを注いでもらって、厨房を出て行くこうとすると後ろから呼び止められた。

大鍋の前で汗をかいていた、恰幅の良い壮年の料理人が小袋を差し出してくる。

中を覗くと、小ぶりなレカシユの実が3つ入っていた。

「今日はいつが安く手に入ったらしくてな、南にもちと分けてもらえたのさ。」

「え・・・、でも、昼のメニューには入ってないですよね？」

分けてもらえたと言っても、下働き用の食堂では1日何千食もの膳がだされるのだ。

その全てにデザートをそえられるほど、レカシユの実が溢れているとは到底考えられない。

困惑気味に料理人に目をやると、彼は悪戯をする子供のようににやりと笑った。

「食堂おん出されちまうお嬢ちゃんに、特別にやるよ。」

「嬉しいです、ありがとう。」

パンの間に野菜やベーコンを挟んで、ナプキンに包むと、ユーリは今度こそ食堂を後にした。

東門付近まで来ると、南地区の喧騒とは一転し辺りは静まり返っている。

空に向かって枝を伸ばす大樹まで駆けて来た彼女は、昼餉と水筒を懐に入れ、幹に手を伸ばす。

するすると登った先、もはや定位置となった枝までたどり着くと、詰めていた息を吐いた。

少し火照った顔に心地よい風は、もう春の気配を含んでいる。

風に髪を遊ばせながら、眼下に広がる光景にユーリは目を細めた。賑わう街並みは祭りに向けて準備が進められ、通りに面した建物には造花で作られた花輪が飾られている。

あれが祭りの前夜から後夜祭までの3日間、華やかな本物の花に変わるのだ。

そして、メイン通りにはたくさんの商店が軒をつらね、商人は今年の春に取れた作物を手で商売に精を出す。

今は屋台の骨組みがまばらにあるだけだが、祭り当日には数倍に増えていることだろう。

活気付く街並みの先には、少しずつ緑萌ゆるトゥリジール山がそびえている。

あの山の向こうに、自分の住む森があるのかと思うと感慨も一入だ。ついついお森から出てきて、まだ一ヶ月にも満たないと言うのに、とても懐かしい気持ちになるのは何故だろう。

偶然見つけた場所ではあるが、自分の住みなれた森に思いを馳せる事のできるこの大樹が、彼女にとってこの王城で一番のお気に入りとなった。

大きな枝に腰を下ろし、ユーリは持ってきた昼餉を膝の上で広げた。走ってきたせいか、少し形が崩れてしまっていたが、味に問題はな
いだろう。

はみ出ってしまった野菜を押し戻してから、彼女はパンの端に齧り付
いた。

ベーコンの香ばしい味と、瑞々しい野菜の甘味が口の中に広がり、
ユーリは思わず顔を綻ばせた。

口の端についたソースを拭こうとポケットに手を伸ばし、ふと思
い出す。

そういえば、ハンカチは第一王子に貸したまま、返してもらうのを
忘れていた。

仕方なく、ナプキンの端で口を拭いて、パンを流し込むためにミル
クを口にする。

あの一件以来、王子殿下とは会っていない。

そもそも、ここは南地区であって、王族が気軽にいい場所では
ないのだ。

恐れていたようなお咎めも、事件もなく、ユーリは平穩に日々を過
ごすことができている。

だから、正直油断していたのも確かだ。

「ユーリ、また会えたな！」

「・・・っぐ、げほっ・・・！」

意外に近い場所で聞こえた、少年期特有のやや高めの声に、彼女は
思い切り食べ物を気管に詰まらせた。

咽たせいで涙で滲んだ視界を、何とか声のした方へと向ける。

彼は心配そうな顔で、自分を覗き込んでいた。ちようど何もなく安堵していた所だったのに、と少し恨みがましい視線になった気もする。

「・・・王子殿下。」

どことなく疲れを滲ませたユーリの声とは反対に、ラズフィスは実に麗しい笑みを浮かべた。

「殿下、もしや後宮を抜け出して来られたのですか？」

「お前に会いたかったんだ。ユーリはこの樹から離れられないだろう？だから余がこちらへ来たのだ。」

「この樹から・・・離れられないとは、どのような意味でございましょう。」

確かに自分は南地区から外へ出ることは適わないが、大樹から離れることは可能だ。

むしろ、この場に居ないことのほうが格段に多いだろう。

眉根を寄せたユーリに、ラズフィスは不思議そうに小首を傾げた。

「だって、お前はこの樹の精霊じゃないのか？」
(どこの世界に食い物を詰まらせて咽る精霊がいますか。)

思わず声に出して突っ込んでしまいそうになり、ユーリは拳を握り締めて耐えた。

溜め息を付きそうになる自分を叱咤し、笑顔を保つ努力をする。

そう、いくら王子殿下といえど、彼はまだ7つの子供なのだ。

空想を信じ、突拍子もないことを言っても許される年だ。

「御期待に沿えず申し訳ございませんが、私は南で働いております唯の下女にございます。」

「南？だが、南の者は皆不思議な言葉を話すではないか。お前は余の傍でよく聞く言葉を話しておるぞ。」

彼の言う不思議な言葉とは、恐らく訛りや下町言葉のことだろう。後宮の深くで教育を受ける王族にとっては、未知の言葉と言えるかもしれない。

「あれは言葉の訛りにございます、なかには私のように話す者もおりますよ。それに、この通り私は食物を食べねば生きてはいけませんぬゆえ、大樹の精にはなれぬかと。」

「そうか。お前はなんだか余の知る者達とは違う気がしたから、つきり人ではないのかと思ったのだ。すまなかったな。」

申し訳なさそうに眉を下げるラズフィスに、ユーリはほんの少し驚いた。

前回の遭遇時に思い切り泣いているところを見たせいか、彼は泣くか笑うかの印象しかなかった。

だが、本来はなかなか表情豊かな少年であるようだ。

好奇心が旺盛である年頃の子供らしく、ラズフィスの興味はユーリの手にする袋の中身へと移ったようだった。

「ユーリ、それはなんだ？初めて見るぞ。」

彼が指差したのは、レカシユの実だった。

それほど珍しい物でもなく、春先にはよく市場に出回る一般的な果物のはずだ。

料理人は王城で仕入れた分を分けてもらったと言っていたのだから、城でも普通に食しているのだろう。

まあ、王族の口に入る物と下働きが食べる物とでは、品質がまったく異なるには違いないが。

しかし、見た目がそう変わるわけでもないのだから、ラズフィスの反応には首を傾げざるを得ない。

「レカシユでございますが。ご存知ありませんか？」

「知っているが・・・、余の知るレカシユは白く柔らかい実に甘い香りがするものだ。このように茶色く硬いものは見たことがない。」

なるほど、とユーリは内心で頷いた。

硬い殻を持つこの果物は、割って食べるのに少し手間とコツがいる。王族の前には上がるレカシユは、きれいに殻を剥かれ、すぐに食べられる状態に出されているのだろう。

だから、あの白くまろく柔らかかな果物と、目の前の硬い殻に覆われた実が結びつかないのだ。

ユーリは皮袋の中からレカシユの実を一つ取り出すと、節に沿って指をのせて力を入れる。

パキリと音がして、表にひびが入ったのを確認し、裏返す。

同じように節に沿って力を加えると、硬い殻が割れ果汁とともに甘い匂いが漂う。

殻を全部剥いてしまえば、間違いなく彼の知るレカシユそのものだった。

「本当にレカシユだ。」

目を丸くして驚くラズフィスに、ユーリは笑みをこぼす。

王子といえども、こうして見ると普通の子供となら変わりない。

珍しい物を見るような視線でレカシユを見ていた彼は、急に真剣な顔になる。

「余にもやらせてくれ。」

「では、こちらを。」

大きめな実の方をラズフィスに渡すと、彼はユーリがやって見せたように殻に力を入れた。

しかし、力のかけ具合や場所が悪かったのか、殻の表面が歪むだけでひび一つ入らない。暫く悪戦苦闘する彼を見守っていたユーリは、ラズフィスの手の中にある実の一点を指した。

「この節の部分に親指をあて、力を入れて殻が歪むようにされると良いかと存じます。」
「こうか？」

彼が幼い手で苦心しながら力を込めると、パキリと乾いた音がした。パツと顔を輝かせ、彼は実を裏返して同じように節の部分に指を宛がう。

今度はそれほど苦もなく殻にひびが入り、先ほどのレカシユより幾分か大きな果肉が転がり出てきた。それを彼が戸惑いなく口にしたものだから、ユーリは少し慌てる。これが毒でも入っていたらどうするのだろうかと考えたが、それだけ彼が信頼してくれているのだと思うことにした。

「美味しいな！いつも食べる物より甘い気がする。」
「それはようございしました。」

白い頬を紅潮させて喜んでいたラズフィスだったが、不意に視線を揺らして顔を曇らせる。じっとレカシユの実を見つめて、何かを考え込んでいるようだった。それは、数日前にこの場所で見つけた、小さくなって泣いている彼に重なる。

「殿下？」

「このように、学べば、努力すれば、すぐにできるようになれば良いのに。」

それは、思わず零れ落ちたような、本当に小さな声だった。

時に突拍子もないことを考え、好奇心もあり、様々な感情を表出させる彼は、普通の少年と変わりなく思えた。

しかし、ふとした瞬間に思い知らされる。

彼が、王の子であるのだと。

王子である彼は、自分には想像がつかないほどの重圧があるのだろう。

なんと声をかければ良いだろうかと悩んでいるうちに、彼は自分で気持ちを切り替えたようだった。

顔を上げた時には、すでに元の少年の顔に戻っていた。

「余はそろそろ戻ることにする。お前が南の者なら、昼の休みであったのだろう。邪魔をしたな。」

「いえ、そのようなことは……。」

結局、かける言葉も見つからないまま、ユーリは頭を振った。

先に幹を降り始めていたラズフィスは、何かを思い出したのか小さく声を上げて動きを止める。

急に振り返られたのに驚き、彼女は息を止めた。

彼のキラキラと光る瞳に、何故か嫌な予感がしてユーリの口元が引

き攣る。

「ユーリ。また、会えるだろうか。」

期待を込めた眼差しで見つめられ、ユーリは言葉に詰まる。

これで駄目だと言ったら、まるで自分が悪者のようではないか。冷や汗を流しながら、暫し視線を彷徨わせていた彼女は、やがて諦めたように溜め息をついた。

「縁がありましたら、おのずと会えましょう。」

自分の首を絞めることを自覚しながら、苦笑交じりに告げた言葉。返されたのは、あの麗しい笑顔だった。

小さくなっていく背中を見送り、ユーリはそっと目を伏せ太陽の少年を思う。

願わくは、彼の光が翳ることのないように。

彼女が囁いた言葉を、風が攫っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1257ba/>

常闇の魔女

2012年1月3日01時52分発行